The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	主体の集合性に関する断章 ： 序に代えて
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2007, 2006, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

主体の集合性についての断章

——序に代えて——

木村　茂雄

1．はじめに

ポストコロニアル社会やその文化についての語りにおいては、程度の差はあれ、ほとんどつねに何らかの種類の主体の「集合性」（collectivity）が意識されてきたように思われる。ある意味でそれも当然のことだ。そもそも「社会」や「文化」という概念自体、基本的には人間主体の集合体を念頭においたものといえる。たとえば「日本社会」について語る場合と「大阪の若者文化」について語る場合とで、その空間的・時間的な枠組みや境界設定の戦略に大きなちがいはあるかもしれないが、「日本」や「大阪」、「若者」などの集合体がその前提とされていることは原則として否定できないだろう。

ポストコロニアルの語りにおいては、このような集合性の意識がさらに前景化されることになる。というのも、その最初の原動力は、ヨーロッパの宗主国の支配力からの集合的な独立の意識や、そのような独立した集合体を築き上げようとする意思にあったからだ。そしてこのような意味での社会や文化は、けっして固定的なカテゴリーではなく、集団的かつ政治的なプロジェクトにほかならない。しかし、前世紀半ばの脱植民地化の時代から現代のグローバリゼーション時代にいたる歴史の流れのなかで、また、それと関連して生じたポストコロニアル言説の編成それ自体の変化のなかで、ポストコロニアル主体の集合性に対する意識も大きく変容してきたといえる。また現在、それはこれまでにない種類の危機と可能性を孕んだ、新しい局面に入っているように思われる。以下、このような推移を簡単に辿ったうえで、他の５人の執筆者の論考を紹介し、本報告書の序論に代えたい。

1．ネイション・ビルディングからアイデンティティ・ポリティクスへ

旧植民地における脱植民地化の運動の中心には、「民族自決」や「国家建設」（ネイション・ビルディング）の理念が据えられていた。そして、たとえ一時的にせよ、そこには新しい集合体としての新国家にかける熱気が生れ、文化的な創造力の発散があった。またこの時代は、第２次世界大戦後の世界経済の復興期でもあり、新興国家もその余沢を受けるつつ、1955 年のバンドン会議に代表されるように、「第３世界」における国際的な連帯のヴィジョンさえ語られるようになった。しかし 1970 年前後から、これらの新興国家のほとんどが経済的・政治的な危機を迎えることになる。それは国内外の要因が複雑に作用して

生み出された状況といえるが（けっして「野蛮人」が生んだ「野蛮」な結果などではない）、いずれにせよ1970年代には、ポストコロニアル国家のネイション・ビルディングが挫折の時代に入るとともに、そのような状況も1つの踏み台として、アメリカ主導の「新世界秩序」の攻勢が本格化していくことになる。

アカデミックな言説としてのポストコロニアル理論は、このような時代背景において誕生したものである。しかもその多くは、「第3世界」から「第1世界」に移住した知識人移民たちによるものだ。とはいえ、その理論と西洋との「共犯性」を突いたり、脱植民地化運動の「政治性」との対照から、その理論の「非政治性」を批判したりしてみても、話は一歩も先に進まないだろう。脱植民地化の思想がいまでも重要なことはたしかだが、しかしその時代の「集合的」な政治をノスタルジックに振り返るだけでは、現在における新しい集合性を探る努力の妨げにさえなりかねない。そもそも、脱植民地化の思想を代表するフランツ・ファノンの『地に呪われたる者』（1961年）などをみるなら、脱植民地化の最中においても、ネイション・ビルディングの「落とし穴」が十二分に意識されていたことは明らかだ。ファノンはそこで、アルジェリア内部の「ナショナル・ブルジョアジー」に対する苛烈な批判を展開し、反ナショナリズム的なナショナリズムとでもいうべき「きわどい」立場から、独立国家における新しい（ヨーロッパの模倣ではない）「集合性」の可能性について語っていた。

しかし、国民集合体の可能性を批判的な立場からでも想像し得たファノンとは異なり、遅れてやってきたポストコロニアル理論家たちは、その存立自体が危ぶまれつつあった状況において彼ら／彼女らの「ポストコロニアル性」を語らなければならなかった。また当時は、「第1世界」の内部においても、国民国家の「神話性」に関する検討が盛んに進められていた。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』（1983年）は、その記念碑の1つである。さらに、「1968年」の挫折を経たフランス知識人たちのポスト構造主義が思想的なヘゲモニーを握り、国民国家やその進歩史などの「全体性」や「大きな物語」が手厳しい攻撃を受けつつあった時代でもある。ポストコロニアル理論がこれらの潮流から大きな影響を受けたことは事実だが、しかしそのことは、この理論の「西洋性」の証ではなく、そのハイブリッドな力強さの源とみることもできるだろう。それはともかくとして、ポストコロニアル主体の集合体を想像し、それについて語ることが、この時点では相当難しくなってしまっていたことは間違いない。

また1980年代は、上のような潮流とも連動しつつ、カルチュラル・スタディーズが脚光を浴びはじめた時代でもある。この「分野」はもちろん、労働者階級の社会文化を中心とするイギリスの文化研究を「ルーツ」としているが、それが他の英語文化圏、とくにアメリカに飛び火するなかで、「階級・人種・ジェンダー」をめぐるアイデンティティの政治文化へとその関心が拡大される一方、アメリカ社会がその「闘争」を集約する場として中心化される傾向も強められた。マルチカルチュラリズムを基軸とするアイデンティティ・ポリティクスの時代がそこで準備され、主体の集合性の細分化という現象が進んでいくこと

になる。これらの集合的「アイデンティティ」の主張が、さまざまなマイノリティの力づけや地位確立に貢献するなど、一定の成果を挙げたことはたしかだろう。しかし、個々の集合体が相互の力を相殺するようなかたちで乱立状態に陥り、その全体が体制的なマルチカルチュラリズムに取り込まれる危険性も、そこには潜んでいた。ただし、ポストコロニアル理論やカルチュラル・スタディーズがこのような危険性に無自覚だったわけではく、その理論家たちは、アーティキュレーション（articulation）という概念を梃子に、このような集団性の細分化の必然性とその連帯の必要性との調停を図ろうとした。

この言葉は、トレーラー・トラック（articulated lorry）や人体の「関節」のように、「分けて繋ぐ」という二重のプロセスを含んだ概念であり、直訳するなら「分節＝接合」となる。すなわち、主体の集合体の細分化という状況を踏まえたうえで、その相互の複合的な関連性を形成し直すことにより、ミニマルな主体の集合体を越えた政治的パワーを現実化することが、この概念に込められた意図といえる。それは非常に重要な試みであったといえるが、しかし、一見相反する2つのプロセスを重ね合わせたこの概念が、ある意味で「きわどい」ものであったこともたしかだろう。あるいはその緊張状態に、私たちがどのくらい耐え得るかという問題もある。いずれにせよ、時代を経るにしたがって、そのダイナミズムや緊張は平板化され、山田雄三が指摘しているように、さまざまな面における「分節」の作業は進められたものの、この概念のより本来的な企てといえる「接合」の努力は、どちらかといえばおざなりにされがちであったといわなければならないだろう（山田雄三『感情のカルチュラル・スタディーズ』開文社出版、2005年：209）。

それに加え、1989年以降加速化したグローバリゼーションの動きは、ポストコロニアル主体の集合性にさらに新しい種類の問題を突きつけることになる。

2．新しい主体、新しい集合性

グローバリゼーションの進行がもたらした1つの重要な現象は、主体の位置性それ自体の流動化ということである（このセクションは『英語青年』2007年4月号の木村茂雄「ポストコロニアリズムの課題――ポストコロニアル性とグローバル性」の敷衍あるいは変奏であることをお断りしておく）。「第3世界」から「第1世界」への大量の移民や、世界各地における移民社会の拡大などをその典型とすることができるが、ただし、この時代における主体の集合性の問題は、文字通りの人間の移動に限られるわけではない。たとえば金銭の流れという面で、移民からの送金に自国経済の大きな部分を負っている国も少なくない。また、これらの移民を生み出す国内的・国際的な状況という本質的な問題や、移民の排出国における社会変容という問題もある。さらに、これらの移民と本国との関係も、近年のマスメディアの発達や通信革命のなかで、たとえば脱植民地化の時代とくらべるなら、その様態が一変していることも間違いないだろう。

いずれにしても、このような状況において、「第3世界」と「第1世界」、あるいは「北」と「南」、「東」と「西」など、ポストコロニアル理論の伝統的な地政学的枠組みがその有

効性を失いつつあること、また、これらの地理的な区分が含意していた主体の集合体の輪郭も次第に曖昧化しつつあることは明らかだろう。ただし、このような世界においても、多くの国々の内部で、またそれらの国々のあいだで、貧富の格差が拡大し続けていることは紛れもない事実である。したがって、世界中にこのように拡散し、その集合体がより捉えにくくなりつつある被抑圧者の集合体について想像し、語るための新しい言葉を生み出すことが、いまポストコロニアル理論に迫られている最重要課題の１つといえる。

すでに行われているそのような試みの例として、チャンドラ・モハンティの「3 分の 2 世界」（Two-Thirds World）や、ハートとネグリの「マルチチュード」（multitude）などの概念がある。前者は、「第 3 世界」という言葉の響きを残しつつも、「第 1 世界」と「第 3 世界」との地理的（またイデオロギー的）な境界を越えて世界に拡散した多数者としての（世界の 3 分の 2 の）被抑圧者の存在を言い表そうとしたもので、そのなかでも彼女がとくに注目しているのは、底辺の女性労働者の問題である（Chandra Mohanty, *Feminism without Borders* Duke UP, 2003: 221-51）。ただし、その意図や有効性はある程度納得できるものの、それが基本的に「数」だけを強調している点にはやや不満が残る。また、ハートとネグリの「マルチチュード」も、文字通りには「多数者」を意味するが、彼らはその集合体を「非物質的労働」およびそれにともなう「協働」の精神、「知的創造」、「コミュニケーション」の中心性などによって特徴づけている。この試みは、基本的に、産業労働者階級の影が薄くなった現在の資本主義経済において、それに替わる新しい階級の形成を目論んだものといえるだろう（Michael Hardt and Antonio Negri, *Multitude*, Penguin Books, 2004）。大いに注目すべき試みではあるが、それがポスト・フォーディズム時代に入った先進国社会をモデルにしたものだという印象は否定できない。しかし、これら２つの試みが、グローバリゼーション時代における被抑圧者の集合体を新しく想像ないし形成しようとする、非常に重要な試みであることはたしかだ。またそのそれぞれが、労働という要素を重視している点も評価したい。近年の文化論や日常の言説においては、「消費者」に関する語りが大量生産される一方、「労働者」という言葉はほとんど死語になりつつある感もあり、そのような風潮も、主体の集合性の意識をさらに弱体化する方向に働いているように思われるからだ。

スピヴァックが *Death of a Discipline* (Columbia UP, 2003) で提示している、グローバリゼーションを上書きする「惑星性」（planetarity）というヴィジョンも、以上のような問題意識と無関係ではないだろう。「集合性」（“Collectivities”）と題されたその本の第 2 章で、彼女はグローバリゼーション下におけるサバルタンの集合性を想像する可能性について語っているが、そこで重要な手がかりとされているのは、デリダ経由の “teleopoiesis” という概念である。“teleo” は「遠い」、“poiesis” は「形成、創造」であり、「ポエジー」でもある。“distance reading” いう言い換えもあることから、「遠い他者の形象を創造的に読むこと」と、とりあえず説明できるだろうか。だが、いうまでもなく、その他者はけっして「リーダブル」な存在というわけではない。この読みの実践は、むしろ、他者を解読することの不可能性やその意味の決定不可能を充分認識したうえで、他者の視線に自己を曝しつつ、

その形象を創造的に読むという不可能かもしれない試みの可能性に賭けることである。「形象」という言葉は、原文では "figure" であるが、それは人の姿であり、表象であり、レトリックでもある。スピヴァックはこの言葉を、最初、J.M. クッツェーの小説『野蛮人を待ちながら』(*Waiting for the Barbarians*, 1980) の白人支配者が「野蛮人の少女」について語った言葉 "irreducible figure of the girl" から導き出している (22)。つまり、それは最初から「他のものに還元できない / 単純化できない」人間の姿 / 表象として発想されているのだ。そこには読むものと読まれるものとのあいだの断絶があり、その地位の逆転という可能性もある。しかし、このように何の保証もなく、不安定な読みの実践に、スピヴァックは新しい主体の集合体を想像する可能性や、それについて語る可能性を探ろうとしているのだ。

このような思索から私に連想されるのは、スピヴァックの本と同年に出版されたモニカ・アリの小説『ブリック・レーン』(*Brick Lane*, Scribner, 2003) のなかの 1 つのエピソードである。"teleopoiesis" ということで作品中もっとも注目されるのは、バングラディシュからロンドンに移住した姉ナズニーンと、バングラディシュに留まりながらその社会の底辺近くをさまよう妹ハシナとの往復書簡だろうが、しかしその前に、なんとも不可解な「イレズミの女性」("tattoo lady") のエピソードが置かれている。ナズニーンの移民生活は、そもそも、この女性との不思議な交信からはじまっている。「ナズニーンはイレズミの女性に手を振った。ナズニーンが、枯れ草と傷んだ舗石の中庭をあいだに挟んだ反対側のアパートを見ると、イレズミの女性はいつでもそこにいた」(6)。この女性の正体は最後まで謎のまま残されるが、状況証拠からして、どうも白人女性であるらしい。ナズニーンとこの女性が、それぞれの部屋の窓から手を振り合うシーンは何度か繰り返されるが、しかしこの女性が「垂れ流し」の状態で施設に入れられたらしいという噂をナズニーンが聞き、ショックを受けるところで、このエピソードは突然終わってしまう。

ある論者は最近、ハシナからの手紙が現地語から英語に翻訳されたものである以上、それはサバルタンの不可知性を手なずける (英語小説の) リアリズムであり、彼女は「最終的に沈黙を強いられている」と論じている (Alistair Cormack "Migration and the Politics of Narrative Form: Realism and the Postcolonial Subject in *Brick Lane*," *Contemporary Literature*, Winter 2006: 713-717)。この論文は、この小説の「リアリズム」からの逸脱という点も論じていて有益だが、しかし筆者には、この論文が無視している「イレズミの女性」のエピソードこそ、この小説の「非リアリズム」の基調音であり、ハシナの手紙を読むナズニーンそして読者の "teleopoiesis" の可能性、およびその危うさを予示したもののように思われる。遠くて近い、あるいは遠くて近い、自己の分身であると同時に、解読不可能な他者であるような形象を、誤読の危険性を冒してあえて読むこと、そしてそのような読みの実践により、遠い他者と自己との関係性あるいは集合性を想像 / 創造することの可能性を探ること——このようなヴィジョンの表現にこそ、ポストコロニアル文学としての『ブリック・レーン』の「賭け」が潜んでいるように思われるからだ。

3．ポストコロニアル・フォーメーションズ II

大変前置きが長くなったが、本報告書に収められた他の５編の論考を、「主体の集合性」という本稿の関心も投影させながら駆け足で紹介しておきたい。

加瀬佳代子は、ガンディーの抵抗運動における「サッティヤーグラハ」の思想はソローに影響されたものだという定説を、広範な資料に基づいて検討し、その誤謬を明らかにしている。そこからは、ガンディーの言説がその後の西欧の言説空間が取り込まれていく、より大きなプロセスが浮かび上がってくる。ここで気づかされるのは、「集合性」をめぐる攻防は、言葉や言説をめぐる攻防でもあることだ。小杉世は、ニュージーランド先住民マオリにおける「医療の脱植民地化」について、その問題を先住民言語政策や土地回復運動、医療統計、マオリ文学などと関連させながら、縦横に論じでいる。マオリという「集合性」を定義する要素は非常に複合的なものであり、またそれはつねに変容されつつあるものであることが印象づけられる。伊勢芳夫は、文化研究における広い意味での「善悪の基準」、たとえばポストコロニアル理論における「人種主義」と「反人種主義」などの「イデオロギー」の乗り越えの可能性について論じている。ある時代のある場所で生きる人間が何らかの主体の集合体に属している以上、文化研究者もイデオロギーから完全に自由であることは困難だが、そのようなイデオロギーが孕んでいる「権力への意思」を突き詰めて自覚しない限り、解放の言説も権力の言説に反転してしまうことを鋭く指摘している。

山田雄三は、カルチュラル・スタディーズの形成とも深い関係をもつ、第２次世界大戦後のイギリスにおけるニューレフト運動が含んでいた可能性と限界について論じている。当時、旧大英帝国の中心においても、その外部世界との連携を図りながら、ポストコロニアル時代における新しい「集合性」を立ち上げる試みが行われていたが、その試みは結果的に大きな実を結ぶことなく終わってしまう。その試みと挫折の意味を、ニューレフトが継承した２つのモダニズムというユニークな視点から検討している。最後に、古東佐知子は、黒人作家リチャード・ライトの 1953 年の小説 *The Outsider* の分析を通して、「黒人」と「白人」などの人種カテゴリーや、コミュニズムなどの政治イデオロギーのなかに生きることと、その外に出ることとの葛藤について論じている。ある集団の本質主義的な閉鎖性は批判されなければならないが、それに変わる「実存主義的」な個人主義の末路も悲惨である。ここで描写されているのは、「集合性」と「個人性」とのあいだの、容易には解消し得ない深いジレンマである。

たしかに主体の集合性は「すでにそこにある」という種類のものではないだろう。脱植民地化の時代やアイデンティティ・ポリティクスの時代においても、それはつねに想像／創造のプロジェクトであったといえる。いま現在、そのプロジェクトは新しい困難と可能性に直面していることをこの序論では強調してきたが、そのことを踏まえたうえで、新しい主体と集合性のヴィジョンを形成するという試みもまた、「ポストコロニアル・フォーメーションズ」の中心課題の１つであることには間違いないだろう。